

明治以来、教科書で紹介され、「偉人」のイメージがつきまとう伊能忠敬の素顔を知るには、測量日記、幕府への報告、家族への手紙など多くの記録を読むに限る。謹厳実直で、面白くないとされる忠敬だが、重要文化財を含む資料からは、多趣味で意外な人柄が浮かんでくる。

■推歩先生

幕府天文方で十九歳年下の高橋至時から天文学を学んだ忠敬は、結構気さくだったらしく「推歩先生」と呼ばれていた。

「推歩」とは、本来、天文学上の計算のことだが、逆に天測や歩測が苦手だったのをやめてつづられたあだ名だとする説がある。なぜそう呼ばれたのか。忠敬は毎回、自宅を起点にした歩測や天体観測の記録

一面もむしな歌狂

を高橋至時に報告した。が、最初こそ、数値はしばしば異なった。先生としては熱心さを評価したいが、数値が一定しないのは、誤差が二・二%もあつた。そこで、「推歩」と呼んで励ましたというのだ。

■人脈多彩

全国測量に当たっては、

忠敬の多くの友人のアドバイスがあつたはず、と研究者らは見る。事実、友人は多かった。

例えば、国学者の久保木清淵。清淵は自ら復刻した

中国古典「孝経」の序文を忠敬に書かせ、それを漢字者の菅茶山に贈らせ、大物に顔をつないだ。

忠敬は、菅のお陰で測量に行った先々で学者らに歓迎され、何人もの有能な弟子を紹介されている。

有名な狂歌師の蜀山人も友人で、自分も狂歌を詠むようになった。測量先の伊予国(愛媛県)佐田岬では次のような狂歌を詠んだ。

白髪の
三寸丈も何ならじ
伊予のおはなは
十八里あり
忠敬の子孫の一人で、東京都世田谷区に住む伊能陽子さんはこの狂歌を讀んでくすりと笑った。「蜀山人の手ほどきと思いますが、いくら先祖でもほめにくいですね」

■郷土の子

忠敬は、家訓を二通残した。このうち伊能陽子さん宅に残る「家訓心得」の冒頭にこうある。

「一 孝は仁義の根本に候 親の言に従い家事を治る。」

資料に残る意外な素顔

「伊能忠敬画像(部分)」佐原市所蔵

